

諏訪台C遺跡のⅠ・Ⅱ類土器群

— 土器の観察を通して —

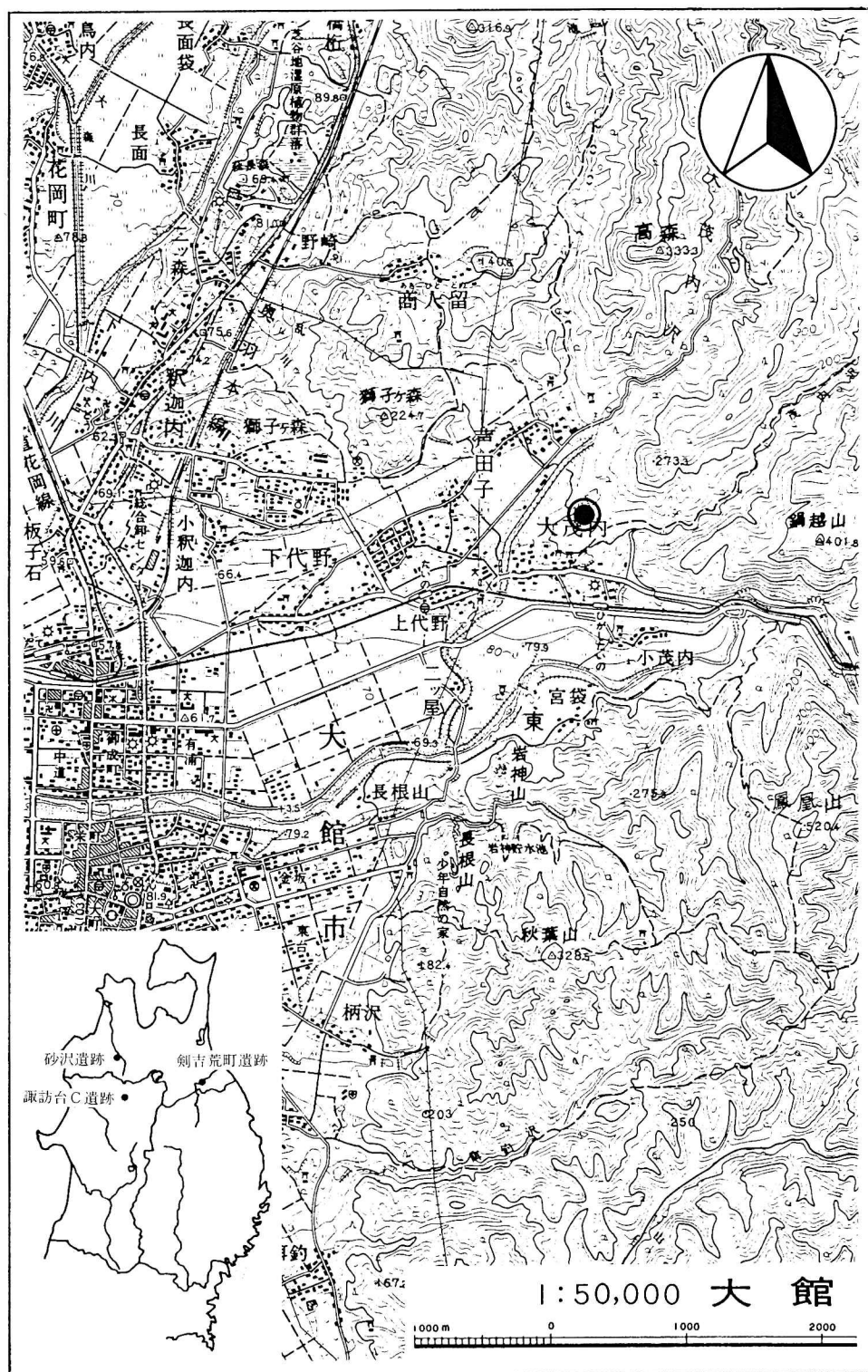
利 部 修

1 はじめに

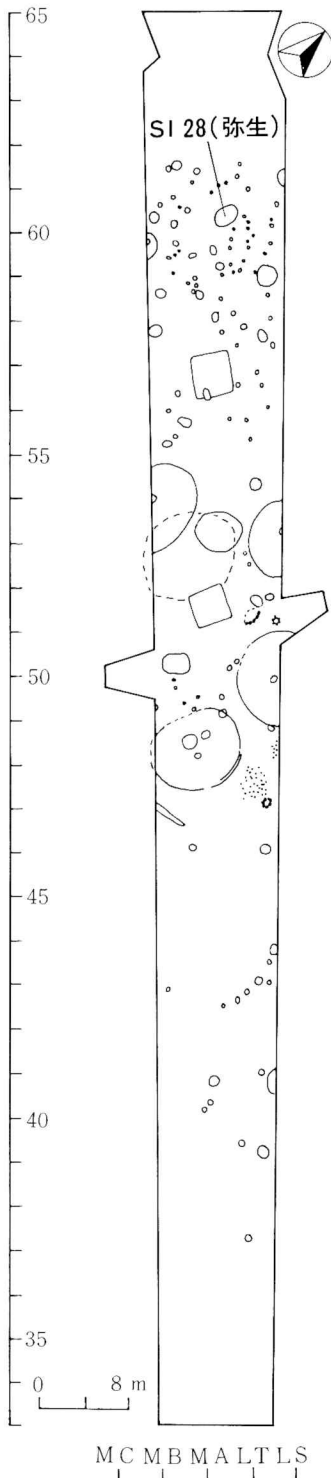
東北北部の縄文晩期終末から弥生時代初頭にかけての土器は、土器型式から大洞A'式 →
砂沢式の推移が考えられている。^(註1)ところが大洞A'式の終末と砂沢式の理解において、大洞A'
式の終末に砂沢式を含める考えと砂沢式は大洞A'式の終末と区別されるとする考えがある。^(註2)
そして、両者の考えが縄文・弥生のどちらの時代に属するかの議論が加わり、^(註3)なおのこと該期
型式の解釈を複雑にしている。この型式理解の相違点は、大洞A'式終末の様相と砂沢式の型
式内容が十分に把握されていない現状に基づくもので、それには2つの留意点があげられる。
1つは良好な出土状況を示す資料が少なかったことである。青森県剣吉荒町遺跡の層位学的調
査や秋田県地蔵田B遺跡をはじめとする各地土器棺墓の調査はあるものの、住居跡出土の一括
資料に乏しかった点である。^(註4)2つには土器の研究方向が文様系統論に終始するあまり、形態や
技法について取りあげることの少なかった点があげられる。^(註5)本論ではこれらの問題点を踏まえ
たうえで、一括資料が出土した諏訪台C遺跡の住居跡出土Ⅰ・Ⅱ類土器群について論じるもの
である。特に土器の技法について言及し、その内容の把握と整理を目的にしている。^(註6)
^(註7)

2 Ⅰ・Ⅱ類土器群

諏訪台C遺跡は秋田県大館市大茂内に所在し、大館盆地の東にある小坂線東田野駅から北約
600mの低い台地上に位置する(第1図)。^(註8)調査区は標高104m前後、広さが約10m×130mの
平坦な舌状台地の西縁辺にあり、台地の南と西側には緩やかな傾斜をもつ沖積地が広がってい
る。時代は縄文時代前期、後期、晩期、弥生時代、平安時代に及び、弥生時代では竪穴住居跡
6軒を検出した(第2・3図)。^(註9)6軒の竪穴住居跡は、3軒の砂沢式併行期と3軒の二枚橋式
併行期に分けることができる。このうち砂沢式併行期としたSⅠ60・61住居跡と住居跡に推定
したSN焼土群の3軒は焼失家屋であり、床面からそれぞれSⅠ60・SⅠ61・SN土器群が出

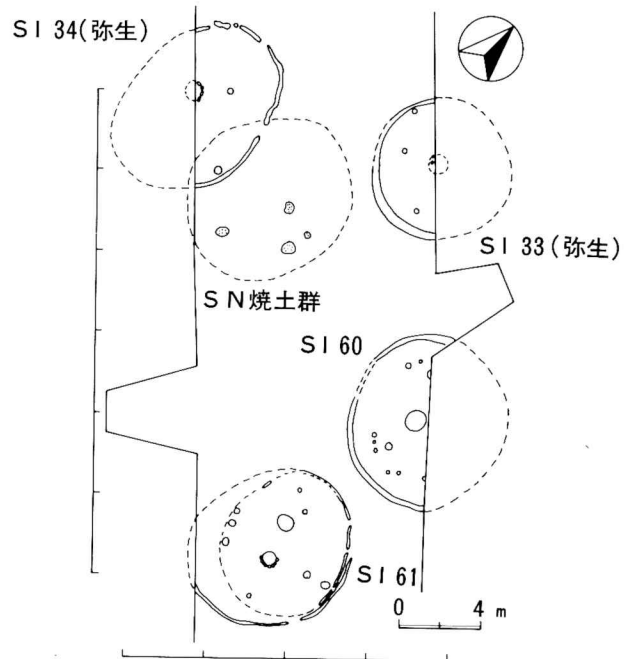


第1図 諏訪台C遺跡の位置



第2図 遺構配置図

土した。3軒のうち建て変えのあるS I 61には2時期の推移が認められ、新しい住居跡の南東壁際からは遺棄された13個体の土器が集中して出土した(第4・5図)。これらは砂沢式とするよりもむしろA'式の終末と考えた方が^(註10)良い土器群である。したがってS I 61では、土器の出土状況から壁際土器群とこれ以外の床面土器群とを区別し、前者から後者の型式学的変遷を予想した。また、S I 61床面土器群の大半はS I 60・S N土器群と形態や文様の特徵から同一型式内と判断し、壁際土器群を所有する意味においてやや古手の可能性が^(註11)あることを指摘した。このことは、壁際土器群とS I 61床面土器群の中に、ささくれた特殊な縄文を共有していることからとも言えることである。以上より、I類土器群はS I 61床面土器群の1点と埋土の1点^(註12)を含む壁際土器群(A群)、II類土器群はA群を除くS I 61床面土器群(B群)、S I 60・S N土器群はC群として把握することができる。以下では土器のもついくつかの特徴がどのような在り方をしているかを問題にするが、その際の比較・検討材料であるA～C群を基礎的内容を含む資料として捉えておく。



第3図 A～C群を出土した竖穴住居跡

3 分析視点

土器の観察には形態・文様・技法などの研究領域があるが、本論では主として技法を中心にした記述を進めたい。一般的に技法と言えば粘土塊から焼成に至る間の成形や調整段階を指し、縄文やミガキを全面に施すこの時期の土器については不適格な研究法と考えられがちである。しかし、装飾や文様に関する技法に焦点を当てるとすれば、そこにはそれなりの技法が展開しているはずである。また、この時期の成形や調整技法についても、課題の設定次第で研究領域は深まるはずである。そこで本論では、技法を土器の製作技法と装飾・文様技法に二大別し、前者では(1)調整技法、(2)壺の製作技法、後者では(1)装飾口縁の作出技法、(2)瘤・沈線の作出技法、(3)所謂変形工字文の作出技法、と技法に関する5つの項目に絞って論じることにする。また、搬入土器について技法をもとに考察してみる。これら5つの視点はそれぞれ土器のもつ属性として置き変えることができるもので、以下ではこの属性がどのような傾向性をもつのか、時間的変遷の判っているⅠ・Ⅱ類土器群の中で観察することにした。

4 製作技法

(1) 調整技法

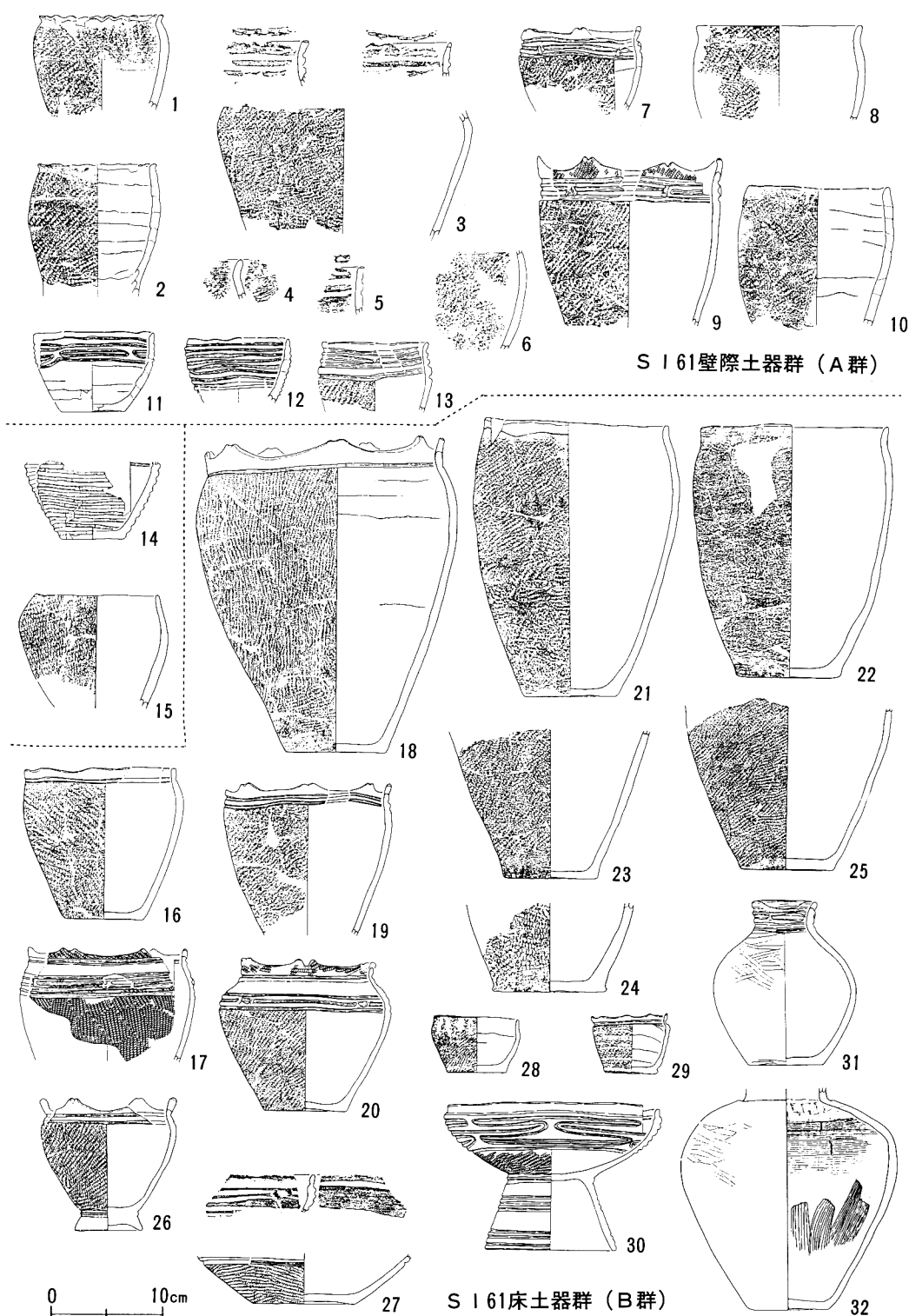
ここでは外面のミガキ調整を中心に扱うが、はじめに甕・鉢類(浅鉢を除く鉢)の口縁部におけるミガキの有無、次に無文帯・沈線・底部におけるミガキの状態について観察する。

はじめに前者について記述する。A群では口縁部にミガキを施すものは皆無であるが、これに対してB群では18・19・21・22・26とその出土頻度は高い。C群では35の1点だけがミガキを施し、その形態はA群には認められずB群には共通する特徴をもつものがある。以上より、甕・鉢類において口縁部にミガキを施すものはB群から認められ、当初多用されていた技法がC群では序々に施されなくなる傾向にある。また、B群において口縁部にナデを施すのは皆無で、逆にA・C群ではナデが多用されている。

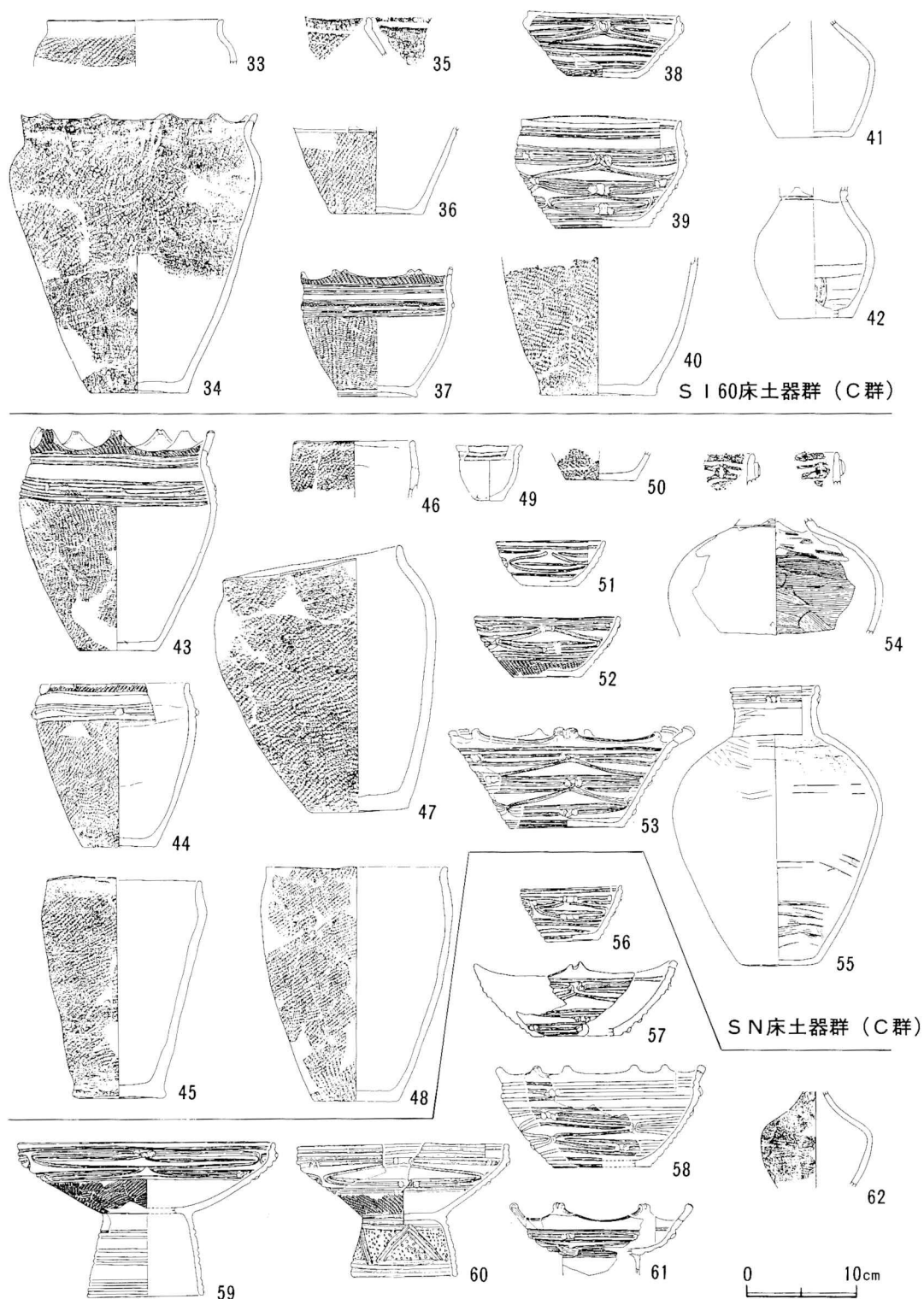
次に後者についてはどうであろうか。はじめに明瞭な無文帯を有する土器について扱い、こ

第1表 土器外面の調整技法観察表(1)

No.	無文帯	沈線	底部	No.	無文帯	沈線	底部
13	ナデ	ミガキ	—	39	研磨	研磨	研磨
17	研磨	研磨	—	43	研磨	研磨	研磨
20	ミガキ	ミガキ	ナデ	44	ナデ	ミガキ	ナデ
30	研磨	研磨	研磨	59	研磨	研磨	研磨
37	研磨	研磨	研磨				



第4図 S I 61出土土器



第5図 S I 60・S N出土土器と遺構外出土土器

これらの土器の無文帯・沈線・底部におけるミガキの状態や有無について観察する。以下、ここでは丁寧で木目細かなミガキを特に^(註15)研磨と表記していく。第1表からも読み取れるように、無文帯に研磨を施す土器は底面にも研磨を施すことが判る。そして、無文帯がナデや雑なミガキを施している場合の底面は、研磨を施していないことも判る。これら無文帯と底部の対応関係は、沈線における調整の対応関係とも一致している。したがって沈線におけるミガキの有無や状態は、無文帯を有している土器に限らず他の土器についても同様な因果関係にあることが想定される。

そこで、次にミガキの有無や状態を浅鉢・高坏・壺に限って観察してみる（第2表）。31・38・60は比較的雑な沈線にも係わらず底面が研磨される例である。これら3点を除く沈線の丁寧な土器は底部にも研磨が及び、逆に沈線の雑な土器は研磨が施されていない傾向を把握することができる。また、底部の研磨は、14や21・22のように体部や口縁部に研磨を施している土器の底部にも同様のことが言える。このことは、外面体部に特徴的な研磨を施す土器は、底部にもミガキが及んでいる可能性が高いことを示している。

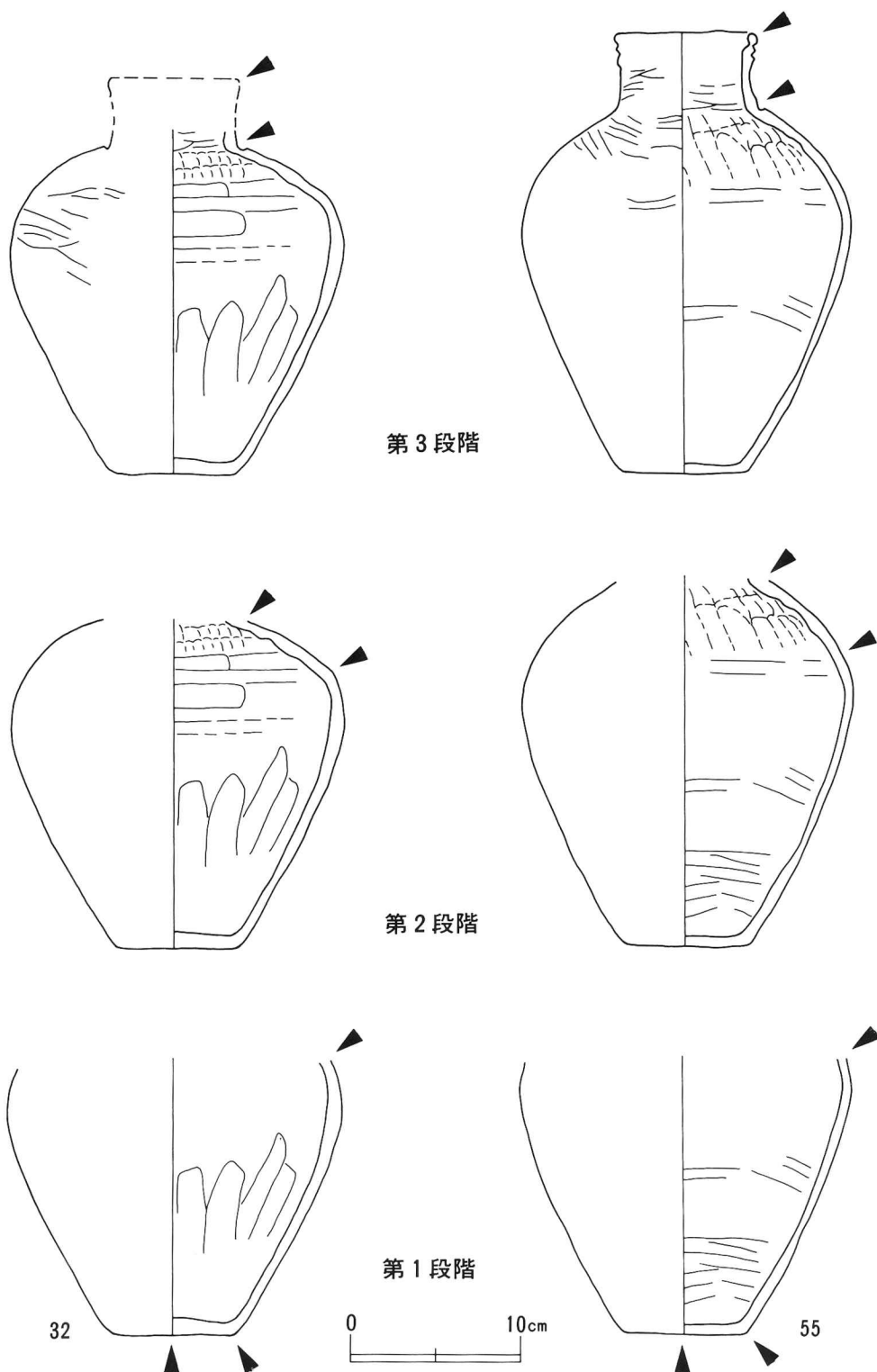
第2表 土器外面の調整技法観察表(2)

No.	器 種	沈 線	底 部	No.	器 種	沈 線	底 部
27	浅 鉢	研 磨	研 磨	59	高 坏	研 磨	研 磨
38	〃	ミガキ	研 磨	60	〃	ミガキ	研 磨
39	〃	研 磨	研 磨	61	〃	研 磨	研 磨
51	〃	ミガキ	ミガキ	31	壺	ミガキ	研 磨
52	〃	ミガキ	ナ デ	32	〃	研 磨	ミガキ
53	〃	研 磨	研 磨	41	〃	—	ナ デ
56	〃	ミガキ	ナ デ	42	〃	ミガキ	ナ デ
57	〃	研 磨	研 磨	54	〃	ミガキ	—
58	〃	研 磨	研 磨	55	〃	研 磨	研 磨
30	高 坏	研 磨	研 磨	62	〃	—	—

(2) 壺製作技法

ここでは高さ25cm前後の中型の壺（32・55）についてその製作技法の相違と（第6図）、高さ15cm以下の小型壺について製作上の諸特徴をまとめることにしたい。

32と55は、32の肩部がやや張り出しているものの形態はほぼ類似している。これらの製作技法は大筋では類似するが、体部内面の調整法においては相違が認められる。以下では、完形に近い壺55の製作工程模式図にしたがって、特に内面観察による製作工程を述べていく。これらの壺には3段階の製作工程がある。第1段階は底部から最大径となる肩部までの製作で、粘土



第6図 壺の製作技法模式図

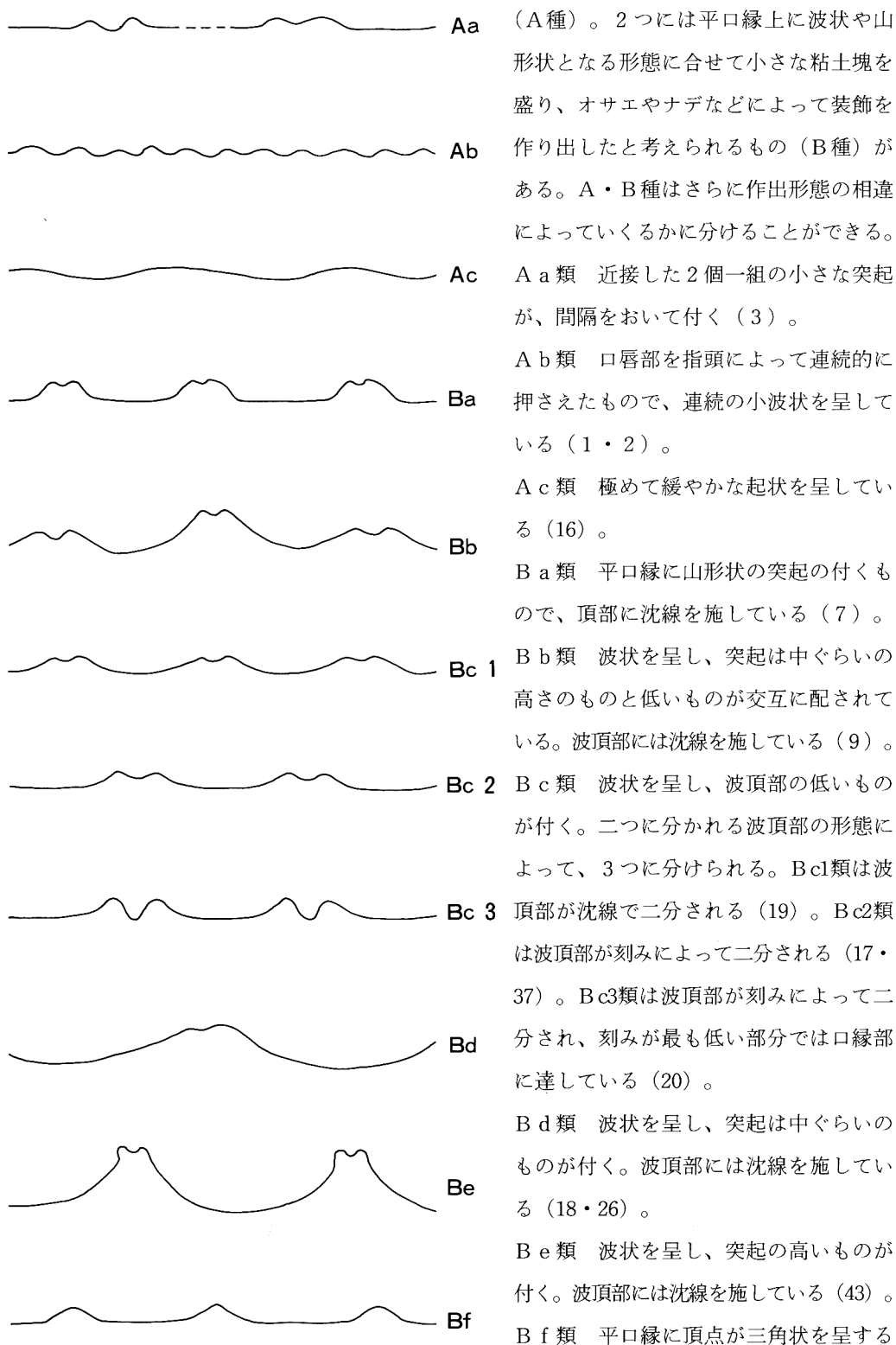
紐を積み上げた後工具による横位のナデ調整を施している。32では、この点が異なりやはり工具による縦位のナデ調整を施している。第2段階は肩部から頸部最下端までで、さらに粘土紐を積み上げ粘土紐と垂直方向に放射状の指によるオサエを施す。その後に、肩部を中心にして工具による横位の入念なナデを施している。ナデを入念に施したのは、第1段階と第2段階の時間差による粘土接合状態の弱さを考慮してのことである。第3段階は頸部最下端から口唇部までで、粘土紐積み上げの後ナデなどの調整を経てミガキを施している。内面における第2段階と第3段階の粘土接合部の調整は、口が狭いので指もしくは布などによるナデを施したと考えられるが、口唇部から頸部最下端に至る短い首の長さとは無関係ではないであろう。この第3段階の頸部と口縁部は、まとめて別個に製作し接合させた可能性もある。以上の製作工程の中で32が55と技法上異なる点は、第1段階の工具による調整が縦位を示す点だけである。両者には、この種の壺製作上類似点が多いことを指摘しておくと同時に、32はB群の55はC群の土器であり共にⅡ類土器群の範中であることも強調しておきたい。

次に小型の壺について考えてみたい。31・41・42・62はすべて高さ15cm以下の壺である。これらの4点の壺には部分的ではあるが煤状炭化物とは考えられない黒色の部分があり、意識的に施した可能性がある。また41は赤色斜彩を施しているが、42と62についてもわずかに赤味を帯びる部分があり赤色斜彩の可能性もある。62は調整に条痕を施しているほか、肩部から頸部までが特異な錨形を呈しており在地産とは考えにくい。また42における粘土紐の積み上げは、接合面が内面上方から外面下方に傾斜する。^(註16)そして、形態や後述する沈線断面形態なども考慮すると、この壺も在地産の可能性が低い土器と考えられる。以上の諸特徴のほかに、31・41・42と先の32・55の壺の中に共通している点が1つある。それは底部の直径が6.7cm前後と一致する点である。5点もの壺の底部が一致することは、それらが同一型式内であることを考えると、壺製作上底部の大きさにある種の規制の働いていたことを示すものではないであろうか。これら小型の壺もⅡ類土器群の範中であり、31はB群、41・42はC群である。

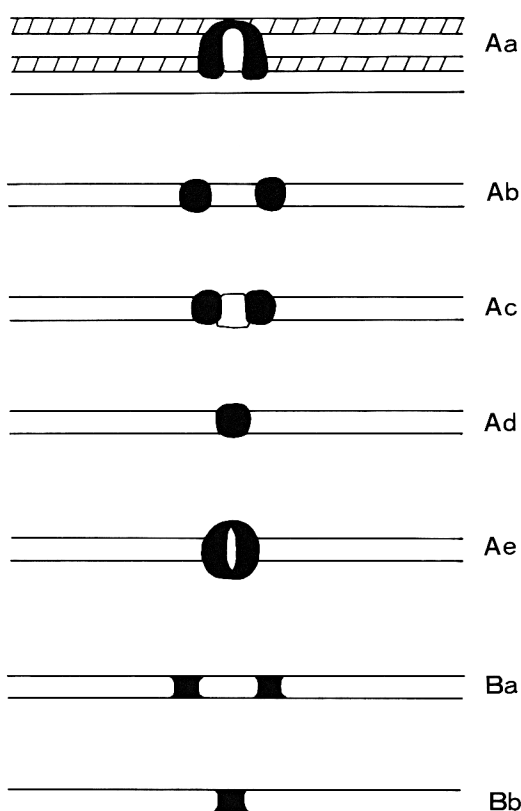
5 装飾・文様技法

(1) 装飾口縁作出技法

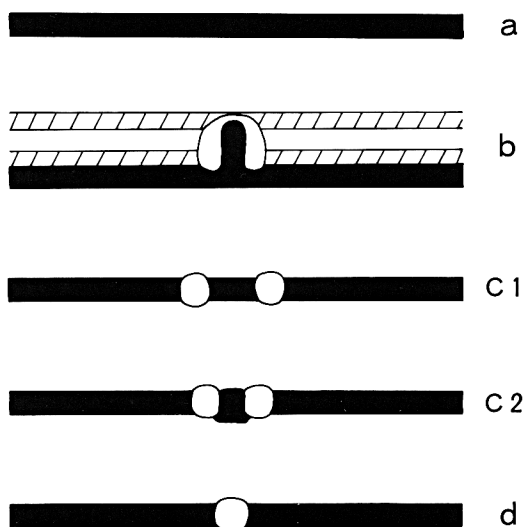
A～C群の中で、口縁部に装飾をもつ器種には甕・鉢類・台付鉢・浅鉢・高坏・ミニチュアがある。ミニチュアを除く甕・鉢類・台付鉢と浅鉢・高坏とは文様系譜上異なった系統をひくと考えられるので、ここでは浅鉢・高坏を除いた器種に限って扱うことにする(第7図)。甕・鉢類・台付鉢の装飾口縁の作出技法は、大きく2つに分けることができる。1つは、平口縁上に指頭によるオサエやナデを施すことによって装飾(性)を表わしたと考えられるもの



第7図 装飾口縁分類模式図



第8図 瘤分類模式図



第9図 平行沈線分類模式図

山形状の突起が付く(34)。

以上の様に分類が可能である。これらの分類をA～C群に対比すると、A群ではAa・b類、Ba・b類、B群ではAc類、Bc・d類、C群ではBe・f類が存在する。Ac類の明確な例はB群であるが、口唇部の微妙な起伏はA群にも認めることができる(11～13)。この様に、A類の装飾口縁作出技法はA群において、B類のそれはB・C群で主流を占めている傾向を捉えることができる。またB群20のBc3類は、特異な形態として注意をしておきたい。

(2) 瘤・沈線の作出技法

瘤と沈線との関わりは、瘤に沈線が取り付いたり沈線の中に瘤が配されたりしている関係にある。瘤は平行沈線を遮断して幾種類かの平行沈線を作り出しており、瘤の状態にもいくつかのバリエーションがある。以下では、瘤と平行沈線に限定して観察してみる(第8・9図)。また、沈線の断面観察についても記述する。

瘤は明瞭に貼り付けの判る貼瘤(A種)と粘土が寄せられて盛り上がりをつくる瘤(B種)に分けられる。以下A・B種の類型を行うが、これらに該当しないものは扱わないことにする。

Aa類 平行沈線上に2個の粘土粒を配し、縦の沈線によって下方が2分され上方では閉じているいわゆる馬蹄形を呈している(7・9)。

Ab類 平行沈線上に、短かい平行沈線

を挟んで2個の瘤を貼り付けている(20・59)。

A c 類 平行沈線上に、エグリを挟んで2個の瘤を貼り付けている(27・52・53・57・58・61)。

A d 類 平行沈線上に、1個の瘤を貼り付けている(44)。

A e 類 大きな粘土瘤を配し、縦に細い沈線を入れることで縦長の瘤を2個つくる(54)。

盛りあがりをつくる瘤(盛瘤と仮称)は、次のように分けることができる。

B a 類 平行沈線上に、短かい平行沈線を挟んで2個の盛瘤を配している(60)。

B b 類 平行沈線上に、1個の盛瘤を配している(31・43)。

これらをA～C群に対比すれば、A群にはA a 類、B群にはA b・A c・B b 類、C群にはA c・A d・A e・B b 類がそれぞれ存在している。これを整理するとA a 類はA群の中に、A b 類はB群の中にだけ認められる。そして、A c 類とB b 類はB・C群に共通しており、A d・A e 類はC群だけの特色である。

瘤と平行沈線との関係において、平行沈線のモチーフに視点をおくとすれば次のように分類できる。

a 類 平行沈線そのもので、起点から沈線が器面を1周して起点にたどりつく。

b 類 平行沈線に、垂直に突出した短かい沈線が付く(7・9)。

c 類 平行沈線が一点鎖線状を呈する(20・27・38・39・52～61)。C 1とC 2に分けられる。

d 類 平行沈線が破線状を呈する(31・37・43・44)。

これらをA～C群に対比すれば、A群にはa・b 類、B群にはa・c・d 類、C群にはa・d 類がある。これを整理してみると、a 類はどの土器群にも認められるが、b 類はA群だけに認められ、c・d 類はB・C群に認められるという特色がある。

次に、工具の違いによる沈線の断面形態について観察してみる。断面は大きくa～d 類に分けることができる。

a 類 断面形が三角形を呈するもので、幅は3～4 mmである(27・30・55・59)。

b 類 断面形が半円形を呈するもので、幅は3～4 mmである(17・32・37・39・43・57・58)

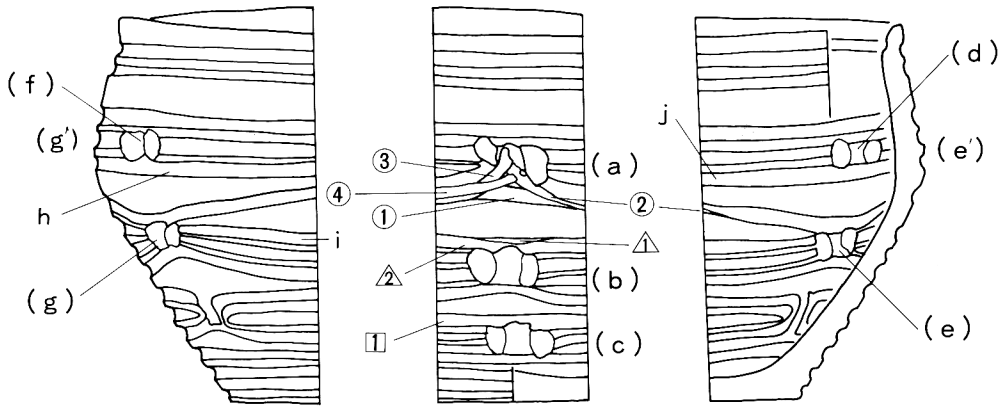
c 類 断面形がコの字形を呈するもので、幅は3 mmである(42)。

d 類 断面形がa～c 類以外のものを一括する。

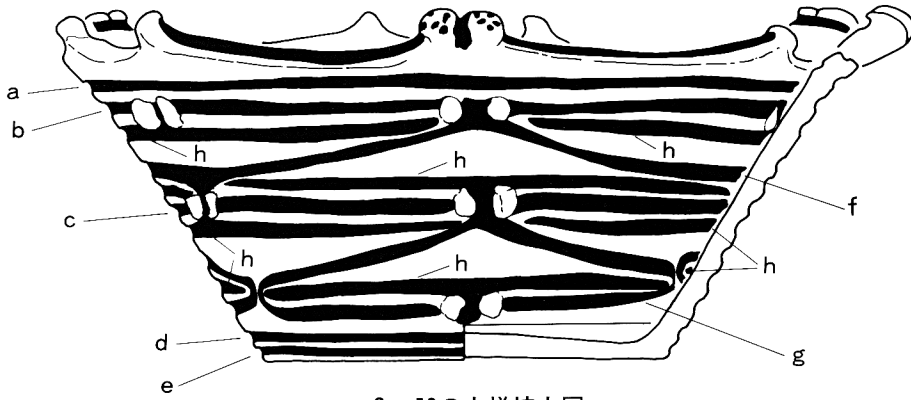
d 類を除くこれらの分類をA～C群に対比すれば、A群にはa～c 類は存在せず、B・C群にはa・b 類、C群にはc 群だけが存在する。このことは、定型化した断面がB群以降に多用される特色として把握できる。

(3) 所謂変形工字文の作出技法

ここでは、所謂変形工字文が重畳している39・53について扱うことにする(第10図)。この類には上下2段の文様帯があり、53に例をとれば上段では隣りの文様と結び付く変形工字文E'

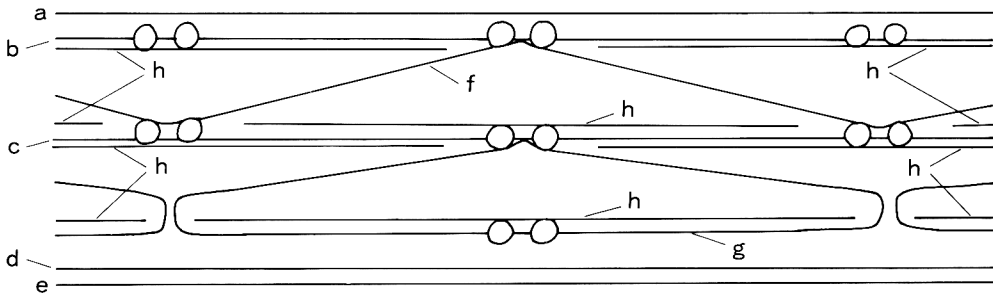


1 39の文様拡大図



2 53の文様拡大図

3 53の文様模式図



第10図 文様施文工程図

(連結型)、下段は三角形に独立したもので変形工字文D' (完結型)^(註17)に近い。以下、文様作出技法について、主に2個の瘤と瘤間に入り込む沈線の観察を通じて論じることにする。第10図の1は39の拡大図である。ここで瘤と沈線に係わる箇所には、(a)・(e')・(g')のように沈線が収束するように見える部分(Aタイプ)とそれ以外の部分(Bタイプ)があるが、全体の中でAタイプは3箇所、他はBタイプで占められている。このうちBタイプは、すべての瘤間で挟り取られているがミガキは及んでいない。そして瘤間のエグリは近接する沈線と較べて深く、別途に作出したことは明瞭である。これに対して(a)や図では陰となる(e')・(g')でも、ミガキによって収束しているように見えるものの、瘤間は深くエグリを施しているのは明らかである。以上より、Aタイプの瘤の両脇の沈線を仮に(ア)とし、瘤間のエグリを(イ)、2個の貼瘤を(ウ)と仮定した時の施文順序は、(ア)→(イ)→(ウ)もしくは(ア)→(ウ)→(イ)と観察できる。したがって、第10図1の(a)に関わす沈線の施文順序として(f)→(a)→(g)→(b)→(e)→(a)→(d)と一連の軌跡を考えることはできない。

次にAタイプの(a)は収束するかに見える沈線とその沈線の内面調整の施工順序が明瞭で、それを順番に示せば、①→②→③→④となる。つまり(a)における沈線は①であり、②～④はミガキを施したものである。(b)もまた本来の沈線の軌跡とミガキによる施工のずれを観察できる例(△→△)であるが、(c)はミガキが沈線と一致している例である。多くの場合、(c)のように丁寧なミガキを施すために、頭初の施工状態を残すものは希である。

以上より39の文様带上段に関する沈線の施文順序は、(f)→(a)→(d)もしくは(g)→(b)→(e)の平行沈線(第1段階)、(g')→(g)→(a)→(e)→(e')の波状文(第2段階)、(h)・(i)・(j)の平行沈線(第3段階)となる。技法上から文様の描き方を忠実に追跡すると、上段の所謂変形工字文は、上述した1～3段階の文様施文工程によって構成されたものであり、横位に転回する流水状の変形工字文からの変化とはかならずしも結びつかない。

次に53についてはどうであろうか。39のような文様構成は53についても同じようなことが言える。すなわち、文様帯の上段では、瘤とエグリを伴う2本の平行な沈線と波状文、そしてそれらによってできた三角形の底辺に平行な平行沈線^(註18)を施すことによって構成されている。53の下段における独立した三角形だけは39と違いがあり、上位瘤間と三角形の頂点が連結している。

ここで所謂変形工字文が重畳している39や53のタイプにおける文様施文順序を、53を例として整理してみると以下ようになる(第10図3)。①上下文帯を区画する文様を施す(a-d・e)。②上・下段の文様帯を規定するために基準線となる文様を施す(b・c)。③上段では波状文、下段では三角文を施す(f-g)。④沈線によって、三角部分の底辺に沿う平行沈線を施す(h)。このような大まかな文様施文順序を想定することができる。以上のような文様を有している土器が、C群の中に認められることに注意する必要がある。

6 搬入土器について

ここでは、搬入土器について若干の諸見を述べてみたい。はじめに、当遺跡から出土した土器の中には、金ウンモを含んでいる27・30・55・59の浅鉢・高坏・壺の存在がある。この4点の土器はB群から2点、C群から1点、遺構外から1点出土した。これらの土器は、顕著な砂粒を含まない精選された粘土を用い、全体がカサカサした感じの良好な焼きで、茶褐色～これが脱色したと思われる灰褐色にいたる色調をもつ丁寧なつくりである。この4点の土器には以上の類似性のほかに、沈線の断面が三角形（沈線断面a類）を示し、他の土器には認められない共通した技法をもつ。さらに金ウンモについて言及すれば、次のようになる。①4点を除いて当遺跡から出土した土器には金ウンモを含むものはない。②砂沢遺跡から出土した多量の土器群^(註19)の中にも、金ウンモを含む土器はごく々希である。③岩手県下で金ウンモを含む土器は、^(註20)ごく一般的にかつ広範囲に出土している。以上の胎土・焼成・色調・技法の共通性と金ウンモの存り方から、4点の土器は奥羽山脈を越えた岩手県下からの搬入品と考えるのが最も妥当である。

この他に特徴的な土器をあげるならば、胴部に縦位の縄文を施す17・18・37・43の甕・鉢類がある。これら4点の土器は、B群から2点、C群から2点出土した。この施文技法は青森県下では良く認められる技法であるが、当遺跡では異色である。また浅鉢の39・53・58は、沈線の断面形態が半円形（沈線断面b類）であること、ミガキが沈線内部や外面底部にも丁寧に及ぶこと、大きな貼瘤を有すること、文様帯が上・下二段に構成されていることなどから他の浅鉢とは区別して考えられよう。この3点の土器は、C群から2点遺構外から1点出土した。これらの特徴をもつ3点は、青森県下では一般的な技法や文様であり、他の浅鉢が碗形を主体に口縁部が内弯する傾向をもつ点からしても当遺跡では異質である。したがって、先の縦位縄文の4点と浅鉢の3点は、青森県下からの搬入土器かあるいは技術がもたらされた可能性が強い。

7 まとめにかえて

本論では時間的変遷の判るA～C群を基礎に、5つの属性について論じてきた。この中で、A～C群を通じて共通するのは、調整技法(1)、装飾口縁作出技法(2)、瘤と沈線の作出技法(3)の3つである。はじめに、これらについてまとめると次のようになる。(1)では、外面におけるミガキの調整が、B・C群に多用されてくる。このことは、無文帯の出現と無関ではないであろう。(2)では、装飾口縁作出技法のA類からB類への傾向がたどれる。(3)では以下のような傾向がある。瘤ではA群のA a類→B群のA b類→C群のA c・A d類の傾向があり、大き

な瘤はC群の特色である。平行沈線でもこれと対応して、b類→c 1類→c 2・d類の傾向となる。断面形態では、B類以降に定型化した断面形が出現してくる傾向にある。

このように3つの技法上からの視点でみると、A～C群における3つの属性の変化は明瞭には現われず、漸移的变化を遂げていると言えよう。しかし、A群とC群における対比では、むしろ明確な変化と見てとれるのであり、B群をA・C群の漸移的な特徴を有する土器群として捉えることが可能であろう。A・C群におけるこのような明瞭な変化は、土器組成においても認められる。それはA群における、小ぶりの鉢に関する問題である。この鉢は口径10～12cm程度高さが7～10cm程度のもので、7・11・12・13・14が該当する。これらの土器の機能がB・C群のどれと対応するであろうか。おそらくそれらに対応するのは、C群における小ぶりの浅鉢であろうと思われる。このような対応関係が認められるとすれば、A群とC群は大きな変化を遂げていることになる。そして、これらの過渡期にB群のような大ぶりの浅鉢が出現してくる傾向にある。

次に中型の壺製作技法にみられた共通点と相違点は、このタイプの壺の広がり時代性を明確に捉える上で基礎的内容を含んでいる。さらに55が搬入土器の可能性が高いことは、搬出先の地域における対比をも可能にしている。また、小型の壺においては、前述した諸特徴のほか、胴部中央に最大径を有するものの存在などは、遠賀川系の影響を予想させるものではないであろうか。

また、所謂変形工字文の作出技法では、文様施文の順序と調整技法を排除した時のオリジナルな文様表現に着目した論を展開した。これら上段に配される文様が、波状文もしくは鋸歯文などの連続した文様であることが広く事実として確認されるならば、縄文晩期末葉の文様系譜^(註21)上大きな断絶を見出すことになる。これらの内容をもつ土器はC群の範中にあり、B群の大ぶりの浅鉢における文様施文法がどのようなものであるのか注意を要しよう。

以上、上述したことに形態や文様上^(註22)の変化を加えてA群とC群を対比すると、ここに大きな変革を認めざるを得ない。したがって、諏訪台C遺跡ではA群を縄文時代晩期末葉、C群を弥生時代初頭、B群をC群と同一型式内としながらもその中間的な土器群として把握しておきたい。最後に、本論では諏訪台C遺跡のI・II類土器群について、主に技法の観察からそれらの内容の把握と整理をこころみたつもりであるが、十分に意を尽くせなかった。これらの分析視点の中に少しでも良とする部分があれば幸いである。この文を草するにあたり、和泉昭一氏からは多くの教示を得た。深く感謝する。

註

- 註1 須藤隆 「1. 東日本における弥生文化の成立と展開」『弥生文化の研究』第4巻 1987
(昭和62年)
- 註2 工藤竹久 「東北部における亀ヶ岡式土器の終末」『考古学雑誌』第72巻4号 1987(昭和62年)
- 註3 弘前大学教育学部考古学研究室「牧野Ⅱ遺跡出土遺物について(1)」『弘前大学考古学研究』第1号 1981(昭和56年)
- 註4 縄文文化検討会編「1. 各県における弥生式土器編年研究の現状と課題」『東北地方の弥生式土器の編年について』 1988(昭和63年)
- 註5 青森県立郷土館 『名川町剣吉荒町遺跡(第2地区)発掘調査報告書』 青森県立郷土館調査報告書第22集 1988(昭和63年)
- 註6 秋田市教育委員会 『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書』 1986(昭和61年)
- 註7 新谷雄蔵 「津軽地方における砂沢系土器群の分類的研究」『北奥古代文化』第7号 1975
(昭和50年)
- 註8 秋田県教育委員会 『諏訪台C遺跡発掘調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第196集 1990
(平成2年)
- 註9 砂沢遺跡出土土器のうち、どれが砂沢式であるかの検討は、現在まとめられつつある報告書で詳細になるであろう。現状では一応、水田を伴った土器が掲載されている報告をもって、砂沢式土器の標式と考えておく。
- 村越潔 「砂沢遺跡の水田址」『日本における稲作農耕の起源と展開』 1988(昭和63年)
- 註10 これらの土器の中には小ぶりの鉢を含んだり、文様的には重畳している平行沈線や口縁部に集中する楕円文、口縁部の形態として連続する小波状口縁がある。これらの特色は、大洞A'式とされる青森県剣吉荒町遺跡出土土器に類似する。
- 註11 前掲註8のまとめ2(Ⅳ群土器について)の中で述べてある。
- 註12 この15と14の土器は、胎土・焼成・色調が同一である壁際土器群と同様の特色を持つ。
- 註13 佐藤嘉広氏はこの時期における土器の属性について詳細に論じているが、あまりに細かな分析はかえって事実を伝えにくくすると思われる。したがって本論で扱う属性は、氏の捉えている土器のもつ個々の変化を対称としたものとは異なっている。
- 佐藤嘉広 「東北地方北部における弥生文化受容期の様相」『岩手県立博物館研究報告』第7号 1989(平成元年)
- 註14 26の台付鉢は床面から約20cm浮いて出土しているものであるが、炭化物の土層から出土

したものでS I 61に帰属する土器と判断している。27も26の付近から出土し同様のことがいえる。ただし、27の口縁部はS N焼土群から出土したが、同一個体と判断したものである。

註15 一般に研磨は光沢のある土器を指し丁寧なミガキ調整をもつが、光沢のないものの中にも丁寧なミガキはある。したがって、ここで雑なミガキと区別するために研磨を光沢のあるものに限定しないで用いることにする。

註16 家根祥多氏は、粘土紐の上面が土器の内側に向って傾斜する作りを内傾その逆を外傾とし、西日本の縄文晩期の土器は内傾弥生前期のものは外傾となることを指摘している。

家根祥多 「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』 1984（昭和59年）

註17 前掲註2に同じ

註18 三角部分が施文されてから底辺に沿って平行沈線を施す手順は、平行沈線が三角形の底辺中央にある瘤を切り込んでいる事実や、平行沈線の両端が区画に合せて細く浅い状態になることでも裏付けられる。

註19 1989年12月、村越潔先生のはからいで砂沢遺跡出土土器を実見させていただいた。その機に、金ウンモについて観察した所見に基づいている。

註20 岩手県における金ウンモの分布について、小田野哲憲氏からご教示を得ている。

註21 横位に転回する波状文や鋸歯文の分布が広く認められるとすれば、千葉県成田市荒海貝塚出土土器など関東や東北部の鋸歯文とも見てとれる文様（田部井功氏は変形工字文を主文様とする文様帯としてとらえている）にも係わりをもつ可能性がある。

田部井功 「関東地方晩期縄文式土器の研究」『古代探叢』 1980（昭和55年）

註22 註11に同じ